

# 男女別社会経済指標の構築とその適用

——就業構造基本調査と 2015 年 SSM 調査データを用いて——

東京大学

藤原翔

## 1 男女別社会経済指標

日本の社会階層研究では、職業的地位尺度として主に職業威信スコアが用いられてきたが、一般に各職業に対して男女で同一の職業威信スコアが与えられている。男女別の職業威信スコアやそれをもとにした社会経済指標 (SEI) の開発には様々な困難があり、女性の職業的地位をうまく捉えられていない。そこで本研究では、職業小分類、学歴、個人所得の情報のある公的統計データを活用し、職業威信スコアを基準として用いない SEI の構築方法から、男女別に SEI を求める。そして求めた SEI を社会移動研究に適用し、男女別 SEI の意義を示す。

## 2 推定方法

2007 年と 2012 年の「就業構造基本調査」の 20 歳から 64 歳までの有職者データを用いる ( $n = 949,870$ )。学歴  $E$  ( $i = 1, \dots, 4$ )、性別と職業の組み合わせから作成した  $O$  ( $j = 1, \dots, 450$ )、そして個人収入  $I$  ( $k = 1, \dots, 4$ ) のクロス集計に、Association Models を適用した。  $F_{ijk}$  をモデル下での期待度数とすると、SEI ( $v_j$ ) を求めるためのモデルは、以下のように表すことができる。

$$\log F_{ijk} = \lambda + \lambda_i^E + \lambda_j^O + \lambda_k^I + \phi_1^{EO} \mu_i v_j + \phi_1^{OI} v_j \eta_k + \phi_1^{EI} \mu_i \eta_k,$$

## 3 指標の特徴と社会移動研究への適用

SEI ( $v_j$ ) を平均 50、標準偏差 10 の偏差値に変換し、男性と女性についての SEI をそれぞれ MSEI, FSEI とした。各職業における男女差 (MSEI - FSEI) をみると、すべての職業について男性のほうが女性よりも高いスコアを示し、平均的な男女差は 10.7 ポイントであった。MSEI と FSEI の相関をみると、 $r = 0.900$  となりかなり高い相関を示している。つまり職業の社会経済的序列構造は男女で類似しているといえる。MSEI と FSEI の差があまり大きくない職業は「駐車場管理人」「栄養士」「彫刻家、画家、工芸美術家」「視能訓練士、言語聴覚士」「その他の法務従事者」であった。一方で、MSEI と FSEI の差が大きい職業は「その他の林業従事者」「その他の清掃従事者」「左官」「漁労従事者」「その他の採掘従事者」「集金人」であった。また、女性比率が高い職業ほど、MSEI も FSEI も低くなる傾向があった (それぞれ、 $r = -0.186$ ,  $r = -0.150$ )。女性比率と男女のスコアの差については、相関はみられなかった ( $r = 0.030$ )。

次に、2015 年に実施された「社会階層と社会移動調査」(2015 年 SSM 調査) のデータを用いて、親子の世代間相関を求めたところ、就業者全体のデータから求めた SEI (TSEI) を用いる場合に比べ、男性では MSEI、女性では FSEI を用いたほうがより高い相関係数を示した。さらにこの MSEI や FSEI を用いた世代間相関は、職業威信を基準にした Duncan の SEI を用いた場合と同程度かそれよりも高い値を示した。

以上の分析結果から、男女別社会経済指標の有効性が示されたといえる。

## 付記

本研究は東京大学社会科学研究所 CSRDA2016 年度課題公募型共同研究「わが国における就業と生活行動との関連性についての多角的研究」(研究代表者：伊藤伸介) の成果の一部である。「就業構造基本調査」の調査票情報については、統計法第 33 条に基づき提供を受け独自集計した。また、本研究は JSPS 科研費特別推進研究事業 (課題番号 25000001) に伴う成果の一つであり、データ (2017 年 2 月 27 日版バージョン 070) の使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ管理委員会の許可を得た。